

| 名前 | テーマ | 今回の気づき | 意見・感想など |
|------------------|--|---|---|
| 川端渉 | | <p>ビジネス的な話の中で、アーティスト側では普段は意識していない話となるが、裏で運営側での大変さも聞けて良かった。事業としてチケットを売っていたり、場所を売っているイメージであったが、ここでも人と人の繋がりを重視したものが強く、運営側も作品をつくりあげている行為（行為体）と思える。客体を意識しつつ、行為体でもあるという点が、音楽や音との繋がりを感ずる。音源を録音し客体としてきた作品が、人への影響で行為体となる。音は響いたり、反射したりなど縦波が続いていく。そういった点でも、人が居なければ、その存在もなくなるというところにも繋がっていく。とても儂いものを感じる。</p> | |
| 杉原環樹 | <p>スタジアムのアーカイブに関わるライターとして参加していますが、個人的にも清宮陵一さんの模索されている音楽の新しい領域に関心があります。新しい領域は新しい領域ゆえに、「言葉以前の感覚」のなかで揺らいでいるもの。このスタジアムを通して、そこからどんな音楽の姿が見えてくるのか、それをどのように言葉にすればいいのかを、同席させてもらいながら考えていきたいです。</p> | <p>公共R不動産の飯石藍さんと、Peatix Japanの白勢竜彦さんを迎えた今回。R不動産の事業にはそれなりに馴染みがあったが、白勢さんの話からは、チケット販売プラットフォームのひとつだと思っていたPeatixの、「人が集まること」をサポートするという哲学のようなものが見えて、新鮮だった。たしかに、「人が集まること」は今後も絶対になくなることのない人の営みだろう。その手助けをするプラットフォームというのは、社会的な可能性が大きいと思った。</p> <p>一方で、公共空間の管理という意味では、不安を感じる部分もあった。特に飯石さんがお話しされた、南池袋公園の事例は驚いた。「運沼執太さんがこの場所でライブをしようとして許可が下りなかった」「その是非の判断を地元の『南池袋公園をよくする会』という組織がしている」といった話だ。この話からわかるのは、公園で行われる表現や、その場に「ふさわしい」文化のかたちが、事前に誰かによって判断されているということだろう。</p> <p>ノイズ音楽や過激なパフォーマンスが受け入れにくいのは理解できるが、蓮沼さんの音楽は前衛的ではあるものの多くの人に不快感を与える類のものとも思えず、その判断には非常に違和感を覚えた。最近、あるアーティストと話したとき、彼が、「いまの公共空間は公共的に見えて、じつはマジョリティのための場所になっている（マイノリティは排除されている）」と言っていたが、この公園の事例はまさにそれに重なってしまっているようにも思えた。</p> <p>もちろん、飯石さんがそうした矛盾を自身の課題としながら、公共の幅を実践によって少しずつ広げようとしていることは、お話からもわかった。その取り組みは応援していきたい。一方、今回の発表からは、「公共空間の管理者にとっての”公共”観」が、その場の質に深く関わることを再認識させた。その意味では、違法でない限り、どんな文化に関わる集まりのサポートも行なう（口出ししない）Peatixは、現時点ではより公共的な空間と言えるかもしれない。</p> | <p>毎度のことながら、「音楽」と「公共」という切り口で、これほど多彩なゲストの方たちを呼ぶことのできる企画力に脱帽します。言い方を変えれば、回を重ねるごとに音楽に関わる仕事の幅広さ、深さを実感します。まだすべての回が終わったわけではありませんが、今回のスタジアムでさまざまなゲストの方たちと話してきた言葉は、この時代の音楽の風景を記録するものとしてとても価値があると思います。書籍化希望！</p> |
| 宮内俊樹 (名小路浩志郎) | <p>時勢を読むセンスと、音楽を「自由」にすること</p> | <p>この回の感想はとてもシンプルで、イベントというものが従来の枠組みからどんどん広がってそれがコミュニティとセットになっているということ、そして公共とは何なのかということも誰もが考えるべき時代だな、ということ。海外ではストリート・パフォーマンスや演奏はひとつの「文化」になっている、その差はとても大きい。日本は「文化」はあるが、「公共」という概念が薄い（あるいは輸入した概念である）のだろうか。逆に日本がもっと文化を大切に作る国になるためには、「公共」という概念を浸透させる（あるいは海外との違いを理解する）必要があるのかもしれない。</p> <p>その点でいうと、日本の近代以後の公共性には、土着性と官民支配が混じり合って複雑であり、社会学者の小熊英二がちょうどそういう論考をしていたので貼っておく。 https://www.jstage.jst.go.jp/article/jsr1950/50/4/50_4_524/_pdf</p> <p>白勢竜彦さんによる「毎月15万人が動く」というpeatixの説明は新しいメディアであり公共サービスであると思ったし、飯石藍さんが言う「自由にやりたい人が自由に表現できるのが公共のはず」にいかん官民支配の意識がある行政の人を巻き込むのは大事だと思った。かつて自分がよく足を運んでいた西東京の「はらっぱ祭り」や、静岡の「大道芸フェス」のような事例をふと思い出した。</p> | |